

活 動 報 告

共同研究奨励金グループ活動報告

『戦後、とくにGHQ占領期における在日華僑、在日朝鮮人の生活空間を明らかにする—横浜市・神奈川県内の動きを中心に』

外国語学部 大里浩秋

本研究の3年目の研究は、2年目と同様二つの研究会を開くことを軸に進め、かつ3年間のまとめとなるシンポジウムを開く準備を進めた。以下に二つの研究会（便宜上、「留学生の歴史」班、「プラング文庫と東アジア班」と呼ぶ）を開いた日時と報告者、報告テーマを記す。

「留学生の歴史」班

①日時：2011年2月5日（土） 3時～5時

場所：神奈川大学17号館216室

報告：(1) 戦後の中国人留学生—『中国留日学生報』を素材に（田遠）

(2) 今後の日程について場所：神奈川大学17号館216室

②日時：2011年4月2日（土） 3時～5時

場所：神奈川大学・横浜キャンパス17号館216室

報告：(1) 「清末民初における留日学生とYMCA」（川崎真美）

(2) 資料調査報告（大里浩秋・孫安石）
— a. アメリカ国立公文書館（NARA）, b. 上海市檔案館, c. 台湾中央研究院

(3) 2011年度計画— a. 研究会とワークショップ, b. 天津南開大学シンポ

③日時：2011年6月4日

1. 研究報告「警察講習所の中国人留学生—1937年以降を中心に」（宗村高満）

2. 参加者自己紹介、研究動向

3. 今年度の予定

・10月27日—29日予定の天津南開大学シンポが来年に延期

・『中国留学生通史』3冊の合評会を開くこ

とを決める

・11月5日、6日—神奈川大学・清華大学・中国史学会主催「辛亥革命」シンポジウムに向けた報告の依頼

④日時：2011年7月9日（土）午後3時～5時

場所：神奈川大学・横浜キャンパス17号館216会議室

内容

1. 研究報告—「郭沫若三兄弟の日本留学」（劉建雲）

2. 参加者の自己紹介、研究動向紹介

⑤日時：2011年10月8日（土） 15:00～17:00

場所：神奈川大学・横浜キャンパス17号館216会議室

内容：1. 研究報告—「東方文化事業と陶晶孫」（中村みどり）

2. 参加者の自己紹介、研究動向紹介

3. 今年度の予定と相談

・『中国留学生通史』3冊の合評会—拡大ワークショップ11月26日を予定

⑥日時：2011年11月26日（土）午後1時～5時

場所：東京大学・駒場キャンパス18号館4Fコラボルーム3

内容：李喜所主編『中国留学通史』の合評会

1. 清末編

・第6、7章、清末の留学—川崎真美（中国研究所）

・第11、12章、立憲と政治改革—李曉東（島根県立大学）

・第13、14章、留学生と風俗改良—孫安石（神奈川大学）

2. 民国編

・第1、2、3章、民国初期—大里浩秋

(神奈川大学)

- ・第6, 7章, 南京国民政府時期—高田幸男 (明治大学)
- ・第7章, 抗日戦争—大里浩秋 (神奈川大学)
- ・第8章, 田遠 (神奈川大学博士課程)
- 3. 新中国編
- ・第1, 2, 8章, 王雪萍 (東京大学)
- 4. 参加者の自己紹介と最新の研究動向紹介

⑦日時: 2012年1月7日(土) 15:00~17:00

場所: 神奈川大学・横浜キャンパス17号館216会議室

- 内容: 1. 研究報告—「明治後期の清国留学生教育機関について」(胡穎)
2. 参加者の自己紹介
3. 2012年度の予定と相談

「プランゲ文庫と東アジア」班

①日時—2011年2月28日~3月1日

場所—神奈川大学箱根保養所



【報告と討論】

「前期集団引揚の「ソ連引揚」について」(大澤武司, 熊本学園大学)

「ジョージ・H・カーと沖縄人移民—台湾引揚からボリビア植民へ」(泉水英計, 神奈川大学)

「朝鮮人の移動をめぐる政治学—戦後米軍占領下の日本と南朝鮮」(小林聡明, 東京大学大学院・学術研究員)

【コメンテータ】加藤聖文 (国文学研究資料館)

②日時—2011年4月20日午後3時~5時

場所—神奈川大学横浜キャンパス17号館216室

【報告】1. 「戦後断絶期の中国観1946-1952」

(元神奈川大学教員 田畑光永)

2. 「アメリカ国立公文書館の資料調査報告」(大里浩秋, 尹健次, 孫安石, 小林聡明)

3. その他, 今年度の計画

③日時—5月26日—29日, 滋賀県立大学図書館での資料調査

陳徳勝コレクション(左)と中国の旅行案内に関連する書籍(右)の調査。資料の詳細については<http://www.linc.usp.ac.jp/collection/index.html>をご参照ください。

④日時—2011年12月3日 午後3時~5時

場所—神奈川大学横浜キャンパス・人文学研究所

【報告】(1) 「戦後憲法問題に関する新聞論説, 1945-57年」(梶居佳広)

(2) 「法現象としての憲法—9条に焦点を当てて」(東郷佳朗)

(3) 報告, 打ち合わせ—今後の予定とくに3月シンポジウム開催について

なお, 3月26日10時~5時, 1号館301室で3年間の成果を報告・討論するシンポジウム「戦後日本の原風景」を開く予定。

(注記: 本報告は共同研究グループ「プランゲ文庫研究会」の活動報告を兼ねる)

共同研究奨励金グループ活動報告

「植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験——」

人間科学部 永野善子

1. 研究の目的

本研究は、「植民地近代性」が現れている領域として、「帝国」、「植民地主義」、「ナショナリズム」、「国民国家」、「脱植民地化」、「エスニシテイ」の6つの課題を取り上げ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸地域を対象として、以下の6つを課題として共同研究を行う。そのうえで、「植民地近代性」の概念の新たな構築をめざすものである。

2. 研究グループ・メンバー構成：

永野善子(人間科学部)、小馬 徹(人間科学部)、後藤政子(外国語学部)、尹 健次(外国語学部)、村井寛志(外国語学部)、泉水英計(経営学部)、高城 玲(経営学部)、藤村是清(本学非常勤講師)、菅原 昭(本学非常勤講師)、岡田泰平(成蹊大学)、中林伸浩(桐蔭横浜大学)

3. 本年度の研究活動について

昨年同様、引き続き学内で3回の研究会を開催し、参加メンバーが各自のテーマにしたがって論文の執筆にむけて研究を進めた。とくに研究成果をまとめるために、2011年11月に国立シンガポール大学東南アジア研究学科と合同ワークショップを開催した。さらに2012年3月に箱根においてセミナー合宿を行い、叢書刊行にむけての研究会を行う予定である。

〈第1回研究会〉

日時：6月1日(水)：午後4-6時

場所：神奈川大学横浜キャンパス

17号館401号室

講師：尹 健次先生(本学教授)

論題：「在日朝鮮人にとっての脱植民地主義とは」

〈第2回研究会〉

日時：7月9日(土)：午後4-6時

場所：神奈川大学横浜キャンパス

17号館401号室

講師：中林伸浩氏(桐蔭横浜大学教授)

論題：「東アフリカのキリスト教化と国民文化」

〈第3回研究会〉

日時：11月2日(水)：午後5-7時

場所：神奈川大学横浜キャンパス

17号館401号室

講師：清水 透氏(慶応義塾大学名誉教授)

論題：「Colonial Frontierの液状化をめぐって」

〈国立シンガポール大学東南アジア研究学科との共同ワークショップ・プログラム〉

Comparative Studies on Asia: Colonialism and Modernity

NUS Southeast Asian Studies Department (SEAD)-Kanagawa University Joint Workshop 2011

23-24 November 2011

Venue: Malay Studies Conference Room (AS7, #04-13)

TIME	PROGRAMME	Chair
23 November		
10.15am	Welcome address and introductions A/P Goh Beng Lan	
Session 1		
10.30am	Dr Chie Ikeya Department of Southeast Asian Studies, NUS "Conjoined Genealogy of the Modern: Ladies' Column and Male-to-Female Authorial Impersonation in Colonial Burma"	A/P Goh Beng Lan
11.00am-11:15am	Q&A	
11.15am	Dr Sensui Hideaki Kanagawa University "Okinawans in the Ethnographic Gaze: Changing Political Perspectives and Consistent Colonial Modernity"	
11.45am-12.00pm	Q&A	
12.00pm	Dr Ryoko Nakano Department of Japanese Studies, NUS "Search for Autonomy under the Japanese Rule: Taiwanese Political and Cultural Movements, 1920-1936"	
12.30pm-12.45pm	Q&A	
12.45pm-2pm Lunch		

Session 2		
2.00pm	Dr Murai Hiroshi Kanagawa University	Prof. Reynaldo Iletto
	“Cold War and Reorganization of the Overseas Chinese Communities: In the Case of the Chinese New Villages in Malaysia”	
2.30pm-2.45pm	Q&A	
2.45pm	Dr Andrea Pinkey South Asian Studies Programme, NUS	
	“How New is the New Nalanda? The Brokering of a ‘Modern’ and ‘Asian’ University”	
3.15pm-3:30pm	Q&A	
<i>3:30pm-4:pm Tea</i>		
4.00pm	Dr YOON, Keun Cha (Prof Yoshiko Nagano as translator) Kanagawa University	
	“Resident Koreans (Zainichi) in Japan and Postcolonialism”	
4.30pm-4:45pm	Q&A	
<i>Dinner hosted by Kanagawa University (7pm)</i>		
24 November		
Session 3		
10.00am	Professor Reynaldo Iletto Department of Southeast Asian Studies, NUS	Dr Chie Ikeya
	“Modernity discourse and colonial conquest from the Philippines (1901) to Libya (2011): Reflections on the complicity of academics.”	
10.30am-10:45am	Q&A	

10.45am	Dr Takagi Ryo Kanagawa University "Interaction, Community and State Governance: King's Birthday Ritual and Village Scout Training in a Village of Central Thailand"	
11.15am-11:30am	Q&A	
11.30am	A/P Maznah Mohammad Department of Malay Studies, NUS "Modernization of Syariah Under British Colonial- ism and the Refinement of Identity in the Malay States"	
12.00pm-12:15pm	Q&A	
<i>12.15pm-1:30pm Lunch</i>		
Session 4		
1.30pm	Dr Okada Taihei Seikei University "School Strikes in the Philippines under U.S. Colo- nialism: With a Particular Focus on the 1930 High School Strike in Manila"	Prof. Yoshiko Nagano
2.00pm-2:15pm	Q&A	
2.15pm	Dr Nicolai Volland Department of Chinese Studies, NUS "Hollywood Shanghaied: Cinematic Discourses in Chinese Print Media from the 1920s"	
2.45pm	Q&A	
<i>3.00pm Tea</i>		

3.30pm	Dr Komma Toru Kanagawa University	
	“Toward a Tentative Comparison with Japan’s Language Policies in her Colonies: Making Swahili as an Official Language in the British East Africa”	
4.00pm-4:15pm	Q&A	
4.15pm	Closing Speech by Prof Yoshiko Nagano	
4:30pm	Workshop Ends	

(注記：本報告は、共同研究グループ「植民地近代性の国際比較」の活動報告をかねる)。

共同研究グループ活動報告（2011年度）

日中関係史

11年度の活動は、10年度と同様、関連する内容のうち、プランク文庫と東アジア、中国人日本留学史については共同研究奨励助成の方で、中国における日本租界については非文字資料研究センターの方で研究会かシンポジウムを開き、さらに、本学をあげて取り組んだ11月5、6日の辛亥革命100周年記念シンポジウム「辛亥革命とアジア」（清華大学、中国史学会との共催）の準備に協力したために、グループ独自に活動することをしなかったのは遺憾なことであった。

いつも反省ばかりであるが、新年度はグループ員間の活発な研究交流を期したい。

（大里浩秋）

「文化のかたち」研究グループ活動報告

〔活動内容〕

4月に研究会を開き、今年度の当研究会の叢書刊行を目指して「グローバル化の中の日本文化（仮）」のタイトルで原稿募集の依頼を行った。

5月に集まった原稿10点をもとに、2名の編集委員と共に、最終原稿完成までの執筆予定を決定した。

6月に叢書の出版元の選定を協議し、9月1日を最終原稿提出日とすることを確認した。

9月1日になって、まだ10名分の提出原稿が揃わなかったため、デッドラインを1カ月延期することにした。

11月1日になって、原稿がほぼそろったので出版元と交渉したが、時期的に間に合わせられない旨の返事もらった。そこで出版元を変更し、執筆陣を8名にして最終的に御茶の水書房から出版の承諾を取り付けた。

12月30日に初稿が配布され、8名の各執筆者は校正プロセスに入った。

1月5日に編集委員会を開き、今後の予定を確

認し、以後間違い無く2月中に叢書を刊行する予定である。

（文責：水野光晴）

東アジア比較文化研究会

7月6日（水）16：30～17号館216号室（人文学研究所資料室）

報告者：山口建治

表題：「台州市の『送瘟船』儀礼を見て日本の御霊信仰の成り立ちを考える」

浙江省台州市の「送瘟船」の祭りは、大暑の日「五聖」（五瘟神）を祭り除災招福を願うものだが、鎌倉の御霊神社の祭礼と類似するところがあるうえ、非業死した「五霊」を疫神として祀る点でも共通している。中国の「五瘟神」の信仰は、御霊信仰成り立ちの謎を解く大きな手がかりになる、と報告した。

本年度は上記の1回しか研究会を開催できなかった。活動を活性化していくための方策を、今後模索したい。

（文責：深澤 徹）

言語変異研究

1. 研究内容：言語と社会の関係に関する総合的な研究、今年度は主にポライトネス（言語の対人関係調節機能）に関する調査研究を行った。
2. 論文発表：
 - (1) 「中国語モダリティの機能体系—Palmerモデル適用の試み」『モダリティと言語教育』ひつじ書房
 - (2) 「中国語敬語表現の歴史と現状—マクロ的通時論の考察」『社会言語科学シリーズ (1) 配慮はどのようにしめされるか』ひつじ書房
 - (3) 『敬語の事典』（共編：敬語の教育、敬語の対照の部分を執筆）朝倉書店

3. 学会発表：

テーマ：現代中国語のポライトネス機能の理論的考察—日本人学習者の母語干渉と“失礼”の困惑

日時と場所：2011年10月30日 日本中国語学会第61回大会 松山大学

4. 2012年度は言語政策について調査する予定である。

(文責：彭 国躍)

プランゲ文庫研究会

本学図書館が所蔵するプランゲ文庫の新聞、雑誌コレクションの共同研究を目指す本研究会は2009年に学内奨励研究に採択され「プランゲ文庫とアジア」に関連する研究会を積みかさねている。

3年間の共同研究の中間成果は、2012年3月26日(予定)のシンポジウムで発表する予定である。

2011年度の研究会活動の詳細は、共同研究奨励グループ活動報告『戦後、とくにGHQ占領期における在日華僑、在日朝鮮人の生活空間を明らかにする』(研究代表：大里浩秋)と重複するので省略する。

(文責：孫安石)

活字文化の研究

1. 講演会・研究会の開催：2012年2月中(予定)

2. シンポジウムの開催計画：特になし

3. 活動内容

(1) 活字を通じた日本語教育と異文化理解(国際)に関する調査・研究

(2) 活字文化普及のための教育・啓発活動(教育)に関する調査・研究

以上

(文責：松本安生)

モダリティ研究プロジェクト

活動内容

2008年度から2010年度まで神奈川大学共同研究奨励助成金を受けて活動していたが、助成期間が終了し、人文学研究所の研究グループとして活動を続けている。

2011年度は、各自が研究成果をまとめることが活動の中心となっている。

(文責：代表代行 堤 正典)

〈身体〉とジェンダー

〈身体〉をめぐる事象をジェンダー・近代性・権力といった軸で考察していく。

本年度前半は叢書出版にむけての研究会を行った。叢書題名は、『〈悪女〉と〈良女〉をめぐる身体表象』(青弓社)である。

第3回研究会(2011年7月13日：人文研究所資料室)

報告者：クリスチャン・ラットクリフ(外国語学部准教授)

「明治初期における近代化への不安——自由化された悪人、非人、毒婦」

(文責 笠間千浪)

自然観の東西比較

研究会の開催：2011年6月29日(水)

場所：人文研資料室

議題：メンバー構成と今後の活動計画について

構成メンバー

伊坂青司(代表者)、上原雅文、小熊誠、坪井雅史、鳥越輝昭、前田禎彦、村井まや子

今後の研究課題について、以下のように確認した。

1. 神と自然についての歴史的・思想史的な東西比較

2. 近現代の科学技術文明についての批判的検討

3. 風土についての比較文化論的考察

各人の当面の研究テーマについて、以下のように

確認した。

伊坂：風土と歴史についての比較思想史
上原：神概念の東西比較——多神教と一神教の対話
小熊：沖縄の風土とウタキ（御嶽）
坪井：捕鯨論争と肉食の歴史
鳥越：ヴェネツィアのラグーナ等をめぐる表象史
前田：災害と飢饉の歴史
村井：ヨーロッパのおとぎ話——グリムの森

今後、年2回程度の研究会・講演会を開催し、シンポジウムも計画することとした。

（文責：伊坂青司）

国際シンポジウム「比較文学の視点からみる
改作」(Second International Symposium on Comparative Literature: "Reform, Reuse, Recycle: Comparative Literature Perspectives on Adaptation"), 並びに国際共同研究プロジェクトのワークショップの開催
(事業代表者：クリスチャン・ラットクリフ)

今年度末までに上記シンポジウムおよびワークショップの詳細を確定し、人文学研究所のホームページに掲載することを予定している。2013年度以降も同様の国際シンポジウムを開催し、その成果を人文学研究所叢書として2013年度を目標に出版することを計画している。

（文責：村井まや子）

近代都市の表象

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会（2011年10月26日）

第2回研究会（2012年2月29日の予定）

2. シンポジウムの開催

予定なし

3. 活動内容

本年度後期から、標記の名称で活動を開始した。近代の東洋ならびに西洋の諸都市の来し方もしくは現況について、表象という切り口から分析を試みている。

上記第1回研究会では、個々の会員が関心のありどころを披露。第2回は、鳥越が「〈砂漠〉としての都市—パリ、ラヴェンナ、東京」の論題で研究発表の予定である。

今後、研究会等を積み重ねながら、数年後に人文学研究所叢書を出版することを目標としている。

（文責：鳥越輝昭）

「越境する比較文学」

本共同研究グループの活動の目的と今後3年間の研究計画の概要について討議するとともに、2012年度の本学国際交流事業として採択された以下の事業の詳細について数回検討会を行った。

講演会要旨

人文研究所講演会

スタニスワフ・レム国際シンポジウム

時 間：2011年6月18日（土）14：30時-17：30時

会 場：神奈川大学横浜キャンパス1号館804教室

ポーランドの作家にして哲学者、スタニスワフ・レムについての最初の国際シンポジウムにおいては、講演が三つ行われた。

最初の講演は、レムの専門家として国際的に認められているピーター・スウィルスキ（ヘルシンキ先端研究所）が、「レムの手紙と精神」と題して英語で行った。スウィルスキは、レムやレムの家族との個人的な関係を詳しく報告し、自身の最新の研究プロジェクトについて報告した。レムの書簡や彼のエッセイの中でも最も重要なものに属する「挑発」の翻訳のみならず、批評的論文もいくつか収められている著書『レム論争』についても報告された。スウィルスキはさらに参加者を、クラカウで行われる学会を訪れるよう、また、レムについての新たな本を作る計画に参加するよう、誘った。

二番目の講演は、神戸大学のヴァレリー・グレチュコ「スタニスワフ・レム作品のロシア語訳における検閲の問題」であった。講演はロシア語で行われ、講演者の妻である神戸大学の増本浩子が日本語に逐次通訳した。文学作品の翻訳の過程や、そうした翻訳が異文化間のやりとりにおいて持つ意味から説き起こしつつ、グレチュコは、ソ連時代にスタニスワフ・レムが書いた、厳しい批判も含む文章のロシア語訳や、当時の政治的文化的背景を分析、これらの翻訳の検閲が及ぼした影響を説いた。

三つ目の講演は、東京大学の沼野充義が「スタニスワフ・レム、あるいはラディカルな相対主義者」との題で行った。沼野は、もともと日本語で行う予定であった講演を、参加者の顔ぶれに合わせて英語で行ってくれた。沼野は、レムの最も名高い長編小説『ソラリス』を、レムの文学者としての経歴における転回点として解釈した。それまでの、どちらかと言えば楽観的な普遍主義から、むしろ懐疑的な相対主義への転回が生じ、ソラリスの海は、究極の他者として、すなわち、人間理性の普遍性に対する謎めいた挑発としての役を演じている、というのである。このようなレムの視線への食い違いを見せたのが、ロシア人の映画監督アンドレイ・タルコフスキーによる、この小説の映画化である。タルコフスキーは、この地球外存在の実存の根に回帰しようとしたのであり、レムのように他者との対面を求めなかった、というのだ。

三つの講演に続いて、活発な議論が行われ、20世紀のヨーロッパの最も重要な作家・思想家であるレムについて、さらに共同研究を行うことで一致した。

（文責：ブッヘンベルゲル・ステファン）

開催日：2011年5月27日

会場：11-31

講演者：篠山淳子（付属学校カウンセラー・NPO 法人名あではで神奈川）

演題：「発達障害を持つ人の心に添う」

発達障害と言われるものは、主として三つに分類される：「学習障害」は、読み・書き・算数・運動機能のいずれかに困難のあるもの；「自閉症スペクトラム」として捉えられる「自閉症」「高機能自閉症」「アスペルガー障害」は、コミュニケーション・社会性に困難があり、興味の幅・想像力が限られ、ある種の感覚が過敏になっているもの；ADHD（注意欠陥多動性障害）は、不注意・多動性・衝動性が高いもの、である。

いずれも、親の育て方によって生じたものではなく、脳の何らかの特異性によるものと考えられている。

「自閉症」的な人には、曖昧なものを受け容れにくかったり、耳からの情報より視覚からの情報がよく入ったり、臨機応変に対応しにくかったり、言われたことを言葉どおりに理解したり、大きな音や人のざわめきが苦手だったりすることが多い。

このような障害を持つ人に対しては、①話されることをよく聴く、②短く簡潔な表現をする、③具体的な表現を用いる、④否定的な表現を使わない、⑤できるだけ視覚的に見てわかるように伝える、⑥今から行くことを予告する、⑦一度に複数のことを求めない、⑧答えを待つ時間を取る（10秒ルール）、などを心がけるとよい。

そのような障害を持つ人が、その人の人生を豊かに自分らしく生きるためには、家族の中で、また学校の教員や地域の人々に理解されることが大事である。そうすれば、自分自身を理解し、自分に備わっているものを受け容れ、それを最大限に生かして、困難を克服してゆくことができる。

（文責：下田節夫）

1. 開催日：2011年12月20日（火）
2. 会場：11号館25号室
3. 講演者：小西 優（防衛大学准教授）
4. 演題：コンディショニングと健康
5. 要旨：

アスレティックトレーナーという仕事の役割、その内容についてご講演頂いた。選手のスポーツ外傷・障害の予防からリハビリテーションまでのコンディショニングの一環を行う大切な役割であることの説明があった。スポーツ外傷の応急処置として知られている RICE（Rest, Icing, Compression, Elevation）において、日本では15分くらいの冷却が推奨されているが、その科学的根拠はないようである。アメリカでは長い場合、90分間くらい冷却するケースもあるようである。

小西氏はアメリカの大学院修士課程でアスレティックトレーニングを勉強された経験があり、日本とアメリカの制度や仕事内容等の違いについても説明して頂いた。

新購入主要文献解題 No. 47

1. 現代漫画大観 全10巻（復刻版）別冊1
2. 代田収一・田口鏡次郎 編
3. 大空社
4. 2010年

本全集は、昭和3年（1928）に中央美術社から出版された日本初の漫画全集の復刻版である。復刻版出版元の大空社によれば、この全集の特色は6点ほどあるという。①漫画を初めて歴史的視点でとらえていること ②「漫画は風俗世相・政治社会を風刺する」という視点で編集されている ③文学や紀行文の漫画化など漫画表現の可能性を紹介している ④子ども向け漫画の源流ともいべき大正期の多色刷り子ども漫画が紹介されている ⑤ギャグ漫画の源流としての海外のナンセンス漫画の紹介がされている ⑥明治から大正モダニズムの時期の風俗世相や政治社会が描かれた漫画が選択されている、の6点である。

1920年代は世界的な同時現象として消費社会の大衆化の第一波が到来した時期であった。その時期に、こういった漫画を歴史的視点でまとめるという全集が刊行されたことは、日本もその第一波の影響下にあったことを物語る。モダン＝近代の心性がまずは再帰性に求められるとするならば、漫画を世相風俗の反映したものにとらえ、明治から大正にいたる時代を俯瞰して考察するという視点にそういった心性が発揮されているといえるだろう。

全一〇巻に収録されたさまざまな漫画やイラストは、その時代の出来事を知る一次資料であることはもちろんだが、当時の人々の関心事がどこに焦点化されていたのかを知ることのほうが実りは大きい。たとえば、第九編に収録されている田中省吾のイラスト「銀座が無警察状態になったとしたら…」では、びっくりしている男性のそばで、洋装で断髪のモダンガール二人がカフェの前で取っ組み合いのけんかをしている様子が描かれてい

る。おそらく、当時のモダンガール論議における「モダンガールは昔の女らしさを失った存在だ」といった「新しい女」言説を視覚化したものといえるだろう。そのような観点からみると、この全集は近代日本をのぞく宝箱のようである。

（笠間千浪）



所員自著紹介

1. 書名：『往きて、還る。一やぶにらみの日本古典文学』
2. 著者：深澤 徹（「澤」を「沢」とするのはペンネーム）
3. 出版社：現代思潮新社
4. 出版年月：2011年9月30日
5. ページ数：245頁

神大の立地するヨコハマの「ヨコ」をキーコンセプトに、古典の復権に向けたいくつかの論考を収録している。古典と近現代の作品（たとえば福沢諭吉や丸山眞男、水村美苗のテキスト）とを、同じ平面に「横並び」に置くことで、その間を行ったり来たりする。そうすることで見えてくる、新たな古典への視覚を探ろうとした。タイトルを「往きて、還る。」とした所以である。本書の中身は、大きく三つに分かれる。第一部は総論にあたるが、その表題「日本古典文学における「実学」の転回」は、丸山眞男の論考「福沢諭吉における「実学」の転回」（1947）のもじりである。第二部と第三部は各論で、そのタイトル「歴史物語を遠く離れて」と「日記文学を遠く離れて」は、いうまでもなくジャン＝リュック・ゴダールの『ベトナムを遠く離れて』（1967）のもどきである。絶えず「ヨコ」へとズレ込むことで、本書にはさまざまな〈遊び〉を持ち込んだつもりだが、そもそも「文学」とは〈遊び〉なのである。文学＝遊び。本書は深澤の前著『愚管抄の〈ウソ〉と〈マコト〉』（2006）の続編、というかそのダイジェスト版の位置づけにある。したがって、あつかうおもな対象は、天台座主慈円の歴史評論書『愚管抄』だが、その周縁領域としての「歴史物語」や「日記文学」にも言及している。日本古典文学の研究には、どういうわけか〈遊び〉がない。そこに〈遊び〉を持ち込むこと。本書の表紙のデザインも、おおいに遊んだつもりだが……気づかれないただろうな。

（文責：深澤 徹）

Kiichi Fujiwara and Yoshiko Nagano eds. The Philippines and Japan in America's Shadow, Singapore: National University of Singapore Press, 2011, 340pp.

藤原帰一・永野善子編『アメリカの影のもとで：日本とフィリピン』法政大学出版局
2011年6月、viii+304頁。

本書は、平成17-18年日本学術振興会科学研究費補助金「アメリカの影の下で：日比両国における対米認識と社会形成の比較研究」（研究代表者：藤原帰一）の研究成果を英語と日本語で公刊したものである。英語版には序論と12本の論文が収録され、日本語版には序論と8本の論文が含まれている。20世紀初頭、アメリカはフィリピンを事実上植民地化した。さらにアジア太平洋戦争によって、日本が大東亜共栄圏の名のもとでフィリピンを侵略した。日本は、その後の敗戦に伴い、6年間、アメリカの占領下に置かれることになる。本書は、このアメリカによる支配という経験がそれぞれの政治・社会・文化・歴史に与えた影響を、日本、フィリピン、アメリカの研究者がともに比較考察した試みである。

（永野善子）

1. 書名：『音声学基本事典』
2. 著者：城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 編著
3. 出版社：勉誠出版
4. 出版年月：2011年8月
5. ページ数：xi, 540p

本書は、音声学・音韻論の基本となる約100項目を平易かつ詳細に解説した、一般向けの事典で、28名の執筆者によって書かれている。音声学の事典は少なく、日本では、『音声学大辞典』（日本音声学会編、三修社、1976年）に次いで2

冊目である。音声によるコミュニケーションが重要視され、また、IT化により音声データとして扱われることも増えている今日、音声についての正しい知識はますます必要となっている。本書は、音声学、調音音声学、音響音声学、聴覚音声学、音韻論、アクセント・イントネーション、プロソディー、単音・分節音、日本語の音声についての章に分かれ、それぞれの分野で基本的な項目を解説している。

筆者は、「音響音声学」(pp. 115-122)と「基本周波数・フォルマント周波数」(pp. 126-131)の項目の執筆を担当した。「音響音声学」では、デジタル信号についてと、波形とスペクトルとの関係を中心に解説した。最近では、普通のPCとフリーのソフトウェアで手軽に音声分析ができるが、やはりその結果の解釈には基礎知識が必要である。「基本周波数・フォルマント周波数」では、初学者に混同されやすい両者の概念を説明した。

言語は、音声として実世界に現れる。音声は、身近であり過ぎて、一般の人には馴染みの薄い研究分野である。人間が使っている音声とはどのようなものなのか、一度本書を手にとられてみてはいかがだろうか。

(小松雅彦)

1. 書名：『近代中国都市案内集成—上海編』
2. 著者（監修、解説）：孫 安石
3. 出版社：ゆまに書房
4. 出版年月：2011年5月25日
5. ページ数：全7巻

このたび戦前上海を訪れる多くの日本人が手にした旅行案内を代表する『上海案内』を含めた一連の上海ガイド・ブックがゆまに書房から『近代中国都市案内集成—上海編』として復刻されることとなった。

中国近代史のなかで上海ほど特異な発展を成し遂げた街があるだろうか。上海は様々な顔をもつ。租界に代表される「植民都市」であり、中国共産党が成立した「革命都市」であり、中国人・

欧米人・日本人・ロシア人などが同居する「国際都市」でもあった。

この二〇世紀の前半の上海を、欧米人は「冒険家の楽園」、または「東洋のパリ」というあだ名で呼び、日本人は混沌と猥褻が共存する上海を憧れと軽蔑が入れ混じった複雑な感情を込めて「魔都」と呼んだ。

この「魔都」上海という日本人の上海イメージの形成に谷崎潤一郎、芥川龍之介、村松梢風、金子光晴に至る大正時代の作家の系譜が一定の役割を果たしたことは、周知の通りであるが、この日本人の上海イメージの形成にもう一つの大きな影響を与えたのが、今回に復刻される上海ガイド・ブックであるように思われる。

大正十二（一九二三）年に長崎と上海を結ぶ定期航路が開かれるや上海は日本人にとって最も身近な「西洋」になった。一時期、長崎では「下駄」を履いて上海へ、と言われる位、上海が身近な存在になったことは広く知られる通りである。

しかし、言葉が通じない異国の地「上海」での生活は容易ならざるものであった。初めて海に到着する日本人であれば、まずは、人力車と荷車を雇い、大きな荷物を担ぎ、上海の旅館に投宿しながら下宿先を探さなければならなかった。いよいよ住居が決まれば、次は毎日の日常生活が待っている。「文路が銀座なら呉淞路は日本橋か、其の文路と呉淞路の交叉するところにマーケットがある。肉類、魚類、禽類、野菜さては氷まで、ありとあらゆる日用食品」（『上海案内』第一版、四二頁）を購入し、日々の生活に備えていかなければならない。その後、何とか上海の生活に慣れ、商売も順調な売れ行きが期待できそうな人であれば、花柳界の遊びの作法を覚えていきたい。

そこで求められたのが、上海での生活の作法を案内してくれる旅行ガイド・ブックであり、その代表的なものが『上海案内』（金風社、一九一三年、第一版～一九二七年、第十一版）であった。この『上海案内』は上海の歴史と名所案内は勿論、上海から中国の内地に向かう鉄道の時刻表と料金や上海に滞在する日本人居留民の職種と住所、電話番号をも網羅し、掲載している。また、『上海案内』には当時、上海で商業活動に従事し

ていた日本人の商業広告が大量に掲載されていたことも注目したい。

上海ガイド・ブックは、これから上海に在留する日本人にとっては各種の生活情報を手にいれる指南書であり、上海に在留した日本人にとっては自らが経験した「喜怒哀楽」を映す出す合わせ鏡でもあったと言い換えることができよう。

ところが、明治、大正、昭和期を通して数多く刊行された上海ガイド・ブックであるが、これを時期別に分けると、大きく三つの時期に分けられるように思われる。

まず、最初に、一九一〇年代に上海で金風社（出版社）を経営していた島津長次郎によって刊行された『上海案内』が中心になったガイド・ブック時代。そして、一九二〇年代に入り、上海と日本の経済関係が密接になる時期に上海日本商工会議所が編集に加わった『上海概覧』（一九二〇年版、一九二三年版）、『上海要覧』（一九三九年）など経済情報を主に盛り込んだガイド・ブックが発行された時期。そして、一九三〇年代に入り、満州事変、上海事変などで日中関係が悪化する中、日本国際観光局（現在のJTBの前身）が上海の戦跡めぐりを紹介するガイド・ブックの製作にかかわる時期である。

今回、ゆまに書房が復刻する『近代中国都市案内集成—上海編』は、上記の三つの時期に刊行された代表的な上海ガイド・ブックを集めており、我々は、本シリーズを通して戦前の日本人の上海イメージがどのように形成され、また変容していったのか、その一端を覗いてみることができよう。本シリーズが日本近代史、中国近代史、日中関係史はもちろん、文学、経済など幅広い分野の研究者によって活用されることを願ってやまない。

（孫 安石）

『租界研究新動態』

大里浩秋・孫安石編

上海人民出版社 2011年3月

10年余前に中国・杭州にかつて置かれていた日本租界について個人的に調べ始め、次いで数人の同僚と語らって人文学研究所の日中関係史グループでも租界をテーマにした勉強会を始め、同メンバーで学内共同研究助成を得て租界があった現地の現状調査を行い資料を集め、さらには21世紀COE非文字資料研究でも調査研究を継続し、その後非文字資料研究センターでも引き継いでいるうちに、神奈川大学人文学研究叢書に連なる2冊の成果を公刊することができた。

『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』と『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』がそれであるが、その2冊から7篇の論文を選び、さらに上海の研究者馬長林氏が当地の雑誌に発表した論文を加えて1冊にしたのがこの本である。

長年中国側研究者の協力を得つつ積み上げてきた研究成果を広く中国国内でも読んでもらい、彼らと意見交換をしてさらに研究を深めたいと考えて、非文字資料研究センターの資金援助を得、上海の有数の出版社に依頼して中国語で出版したものであり、これを読んだ人からの好意的な感想が多く寄せられている。

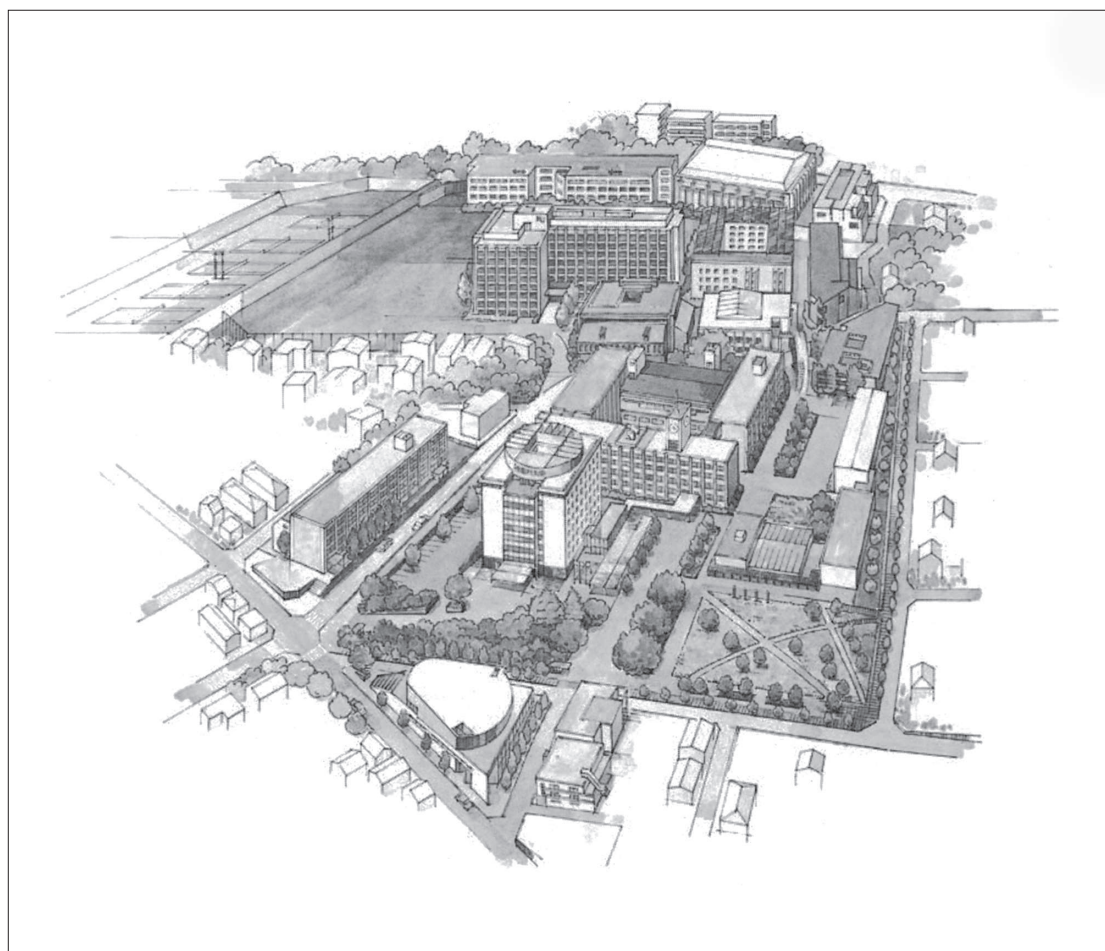
現在は非文字資料研究センターで「東アジアの租界とメディア空間」と題する研究班を作って研究を継続し、中国のみか朝鮮に置かれた租界、さらには横浜を含む日本国内の居留地に関するテーマに関心を広げて、多くの方に協力していただきおもしろい共同研究に発展できればと考えているところである。

（大里浩秋）

神奈川大学 人文学研究所

The Institute for Humanities Reserch

Kanagawa University



◆人文学研究所の事業

人文学研究所は1963年、人文学研究領域相互の活発な研究活動を支援することを目的に神奈川大学の附属研究機関として設立されました。

人文学研究所の主な活動はつぎの4つです。

- (1) 人文学に関する研究および調査
- (2) 研究資料の収集および整理
- (3) 研究及び調査成果の発表のための刊行物の発行
- (4) シンポジウムや講演会の開催

人文学研究所は人文学系の各種テーマによる共同研究グループの共同研究を大きな柱に、様々なシンポジウム・講演会を開催し、また、『神奈川大学人文学研究叢書』を刊行するなど多彩な活動を行っています。

◆人文学研究所の研究活動

人文学研究所の基本的な活動は、共同研究グループによる調査・研究活動と国外研究機関との学術交流の二つに分けることができます。本研究所創設以来、活動を展開した共同研究グループは総数30グループ以上を数えます。

【共同研究グループ一覧】

	名 称	研究テーマ
1	日中関係史	近代以降、現在までの日中関係の諸問題
2	文化のかたち (Culture as Gestalt)	グローカリズムの立場で日本の総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」を拓く。
3	東アジア比較文化研究会	沖縄・台湾の島嶼を中心に、その周辺地域の文化の比較研究。
4	色彩と文化Ⅱ	色彩の色の記号性 - 自然・言語・文化の諸相 -
5	神々のコスモロジー	世界と日本の宗教に関して、様々な分野の研究者がその世界観、教義、意識等、具体的なあり方を考察し、宗教や神々意義を再検討する。
6	言語変異研究	1. 地域文化と言語変異 2. 言語政策と言語変異 3. 言語教育と言語変異
7	植民地近代性の国際比較	「植民地近代性」の概念を軸として、日本、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の政治・社会・文化・歴史の比較研究を行う。
8	ブラング文庫研究	神奈川大学図書館が所蔵するブラング文庫の研究をおこなう。
9	活字文化の研究	1. 活字を通じた日本語教育と異文化理解 (国際) 2. 活字文化普及のための教育・啓発活動 (教育) 3. 活字文化普及による社会環境への影響 (社会)
10	モダリティ研究プロジェクト	統語論的及び語用論的アプローチによるモダリティの対照研究
11	グローバリズムに伴う社会変容と言語政策に関する包括的研究	1. 東アジア環日本海諸国における自国語を対象とした言語政策 2. 東アジア環日本海諸国の自国語の国外普及戦略 3. 移民先進国における言語政策 4. リンガフランカ・コミュニケーションの分析
12	〈身体〉とジェンダー	近代以降の性別境界や表象、意味作用に注目しつつ(階級、「人種」、民族、植民地関係などの要素にも関連付けながら)、ポリティクス/権力が作動する場でありメディアである〈身体〉を考察する。
13	自然観の東西比較	自然観についてヨーロッパと東アジア(とりわけ日本)の比較対象を研究テーマとする。
14	近代都市の表象	夢と幻滅を伴いつつ近代化し、快適さとともにさまざまな問題を生み出してきた欧米・東アジアの都市について、どのような表象が、どのような権力と関連しながら提示されてきたかを検証する。
15	越境する比較文化	比較文学・文化の方法論を用いた研究を行う。
16	ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討する。

◆人文学研究所 2011 年度講演会

	日 時	講演者	テーマ	肩書き
1	5月27日(金)	篠山淳子氏	発達障害を持つ人の心に添う	付属学校非常勤カウンセラー
2	6月7日(木)	伊藤千尋氏	学生時代にできること	朝日新聞記者(特派員)
3	7月9日(土)	中林伸浩	東アフリカのキリスト教化と国民文化	松蔭横浜大学教授
4	6月18日(土)	ピーター・スウィルスキー	レムの手紙と精神(Lem in Letter and Spirit)	ヘルシンキ高等研究院教授
5		ベレリー・グレチコ	スタニスワフ・レム作品のロシア語訳における検閲の問題 (Traduttore, traditore. Political Censorship in Russian Translations of Stanislaw Lem.)	神戸大学教授
6		沼野充義	スタニスワフ・レム,あるいはラディカルな相対主義者 (Stanislaw Lem, or a radical relativist)	東京大学教授
7	7月30日(土)	藤井昇三	辛亥革命をどうとらえるか ―辛亥革命100周年―	電気通信大学名誉教授
8	11月1日(火)	赤石千衣子	これからの働き方と子育て～格差社会を生きるということ～	NPO しんぐる・まごあずふおーらむ理事
9	11月8日(火)	栗原俊之	健康と筋肉脂肪	立命館大学助手
10	12月15日(木)	横尾俊成	思いをつなげる。街を動かす。	東京都港区議会議員
11	12月20日(火)	小西 優	コンデショニングと健康	防衛大学准教授
12	1月20日(金)	富森 崇	東日本大震災における心のケア活動	臨床心理士

◆学術交流とシンポジウムの開催 (2001 年以降)

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「21 世紀—アジアの座標軸を求めて I—東アジアの相互認識」神奈川大学・横浜キャンパス 2001 年 2 月 19 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「21 世紀—アジアの座標軸を求めて II—戦後補償と在外外国人の人権」：神奈川大学・横浜キャンパス 2001 年 10 月 4 日

◇神奈川大学人文学研究所・浙江大学日本文化研究所共催

「第 11 回日中學術交流シンポジウム—歴史と文学の境界」：神奈川大学・横浜キャンパス 2001 年 11 月 5 日～6 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「東アジア近代史とラジオ放送の誕生」：神奈川大学・横浜キャンパス 2001 年 11 月 24 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「21 世紀—マルクス歴史学は死んだのか」：神奈川大学・横浜キャンパス 2001 年 12 月 1 日

◇台湾・香港・上海の大学・研究機関との意見交換 2002 年 11 月 5 日～11 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「アジアのポップカルチャーと日本」：神奈川大学・横浜キャンパス 2003 年 11 月 2 日

◇浙江大学日本文化研究所・中国日本史学会主催

国際シンポジウム「道教と日本文化」：中国浙江省杭州市内 2004 年 11 月 5 日～6 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

国際シンポジウム「世界から見た日本文化—多文化共生社会の構築のために—」：神奈川大学・横浜キャンパス 2005 年 11 月 11 日, 12 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「日本の文化変容と異文化—近世から近代へ」：神奈川大学・横浜キャンパス

2007年11月17日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「表象としての〈日本〉近代ヨーロッパの場合 ―神奈川大学・ヴェネツィア大学
学術交流の現場から―」：神奈川大学・横浜キャンパス 2009年10月3日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「ヴィジュアルとグラフィックの語り」：神奈川大学・横浜キャンパス 2010年8
月24日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「越境する比較文化」：神奈川大学・横浜キャンパス 2011年6月11日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「スタニスワフ・レムについて」：神奈川大学・横浜キャンパス 2011年6月18
日

人文学研究所共同研究グループ一覽

2011年度

名	称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中間係史	近代以降、現在までの日中間係の諸問題。	1. メンバー各自の関心に基づく研究会の開催 2. 学外研究者の講演会、研究交流 3. 日・中相互の留学に関する調査研究、ワークショップ開催 4. 在日華僑に関する研究 5. 中国・韓国における旧日本租界に関する調査研究	大里	大里・中島・松本・日高・山口(建)・鈴木(陽)・彭・孫・村井(寛)・(非)吉川・福・梁・兵・(名)小林(一)・(学外)李・木山・田畑・川島	18	2012年 予定
2	文化のかたち (Culture as Gestalt)	グローバリズムの立場で日本の総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」を拓く。	今年度は、メンバーの刷新を計り、グループの個人々の研究活動を活性化してゆく。具体的には、今年6月初旬にミーティングを開き、各メンバーの研究分野の共通課題ごとに研究班を編成して相互啓発を計る。 夏期休暇中に各研究班の意見を調整して本グループ「叢書」の刊行を準備し、今後の活動の企画を練る。	水野	水野・ブッヘンベルゲル・岩本・小馬・堤・石井・羽佐田・鈴木(幸)・細田・小林・駒走・マコウミ・(非)鈴木(修)・米重・八島(名)中本(学外)大須賀・佐藤・赤坂・サヴィノワ	20	2011年
3	東アジア比較文化研究会	沖縄・台湾の島嶼を中心に、その周辺地域の文化の比較研究。	海上交通を通して地域の文化伝統が混在し、交錯する様相を多角的な観点から跡付ける。 1. メンバーによる研究会を開催し、また外部講師を招いた講演会を開催する。 2. 「沖縄・台湾」地域の研究者との学術交流を積極的に行っていく。	深澤	深澤(徹)・山口(建)・彭・孫・大里・小熊・尹(孝)・渡辺・前田(朝)・鈴木(陽)・小馬・上原・(密)廣田・(経)佐野	14	無
4	色彩と文化II	色彩の色の記号性—自然・言語・文化の諸相—	1. 比較言語学、色名の色空間上における範囲のゆらぎおよびその脚定法の関係、ジェンダー、景観、スポーツ場面、色彩嗜好と思考スタイル等、色彩と文化および自然の関わりについて実験・調査研究を行う。 2. 必要に応じて研究会、講演会を開催する。	三星	三星・新木・小林・堤・八久保・彭・尹(孝)・(密)加藤(薫)・(工)山本・(非)畑田・車	11	無
5	神々のコスモロジー	世界と日本の宗教に関して、様々な分野の研究者がその世界観、教義、意識等、具体的なあり方を考察し、宗教や神々意義を再検討する。		寺沢	寺沢・小馬・山口(建)・尹(孝)・新木・(密)新理・(非)鈴木(彰)	8	無
6	言語変異研究	1. 地域文化と言語変異 2. 言語政策と言語変異 3. 言語教育と言語変異	1. テーマに即した文献資料の収集 2. 研究調査 3. 講演会、研究会の開催	彭	彭・松村・加藤・(非)鈴木(進)・張・山村・陶	7	無
7	植民地近代性の国際比較	「植民地近代性」の概念を軸として、日本、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の政治・社会・文化・歴史の比較研究を行う。	共同研究奨励助成「植民地近代性の国際比較—アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経緯」に基づく研究を行う。年2-3回の研究会を学内で開催し、秋には国立シンガポール大学にてワークショップを実施する予定である。	永野	永野・小馬・笠間・後藤・尹(健)・村井(寛)・土屋・(経)的場・(密)泉水・高城・(非)藤村・菅原・(学外)泉井・東條	14	2012年 予定
8	プランゲ文庫研究	神奈川県図書館が所蔵するプランゲ文庫の研究をおこなう。	昨年(2008年)には私立大学補助金申請が採択され、プランゲ文庫の新聞コレクションが図書館に納入された。また、図書館でも同資料の利用のためPCの導入を決定した。2009年度は同資料の読み込みをかねて3-4回の研究会を開きたい。	孫	寺沢・大里・貴志・孫・村井(寛)・尹(健)・(名)鈴木(修)・(学外)川島・小林・兵	10	無

名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代表者	メンバー	人数	叢書
9 活字文化の研究	1. 活字を通じた日本語教育と異文化理解 (国際) 2. 活字文化普及のための教育・啓発活動 (教育) 3. 活字文化普及による社会環境への影響 (社会)	1. 研究テーマに即した調査・研究の実施 2. 研究会の開催	松本	新木・駒走・小松原・坪井・松本・間山・尹(亭)・高木・(非)和美・木村(祐)	10	無
10 モダリティ研究プロジェクト	統語論的及び語用論的アプローチによるモダリティの対照研究	1. 研究会を開催し、言語形式とモダリティの関係について、各自の研究対象とする言語について成果を発表する。 2. 言語教育において、モダリティがどのような捉えられ、教えられて来たかを検証し、報告する。特に「話者」とモダリティ現象の関わりが顕著な日本語の教育に対して本研究からどのような提言がなされるかを検証する。	佐藤 2011年度は提先行生が代行	彰・堤・西野・辻子・岩畑・尹(亭)・富谷・相原・小林・文・佐藤・寺崎・(名)武内	13	2011年 言語セン ター
11 グローバリズムに伴う社会変容と言語政策に 関する包括的研究	1. 東アジア環日本海諸国における自 国語を対象とした言語政策 2. 東アジア環日本海諸国の自国語の 国外普及政策 3. 移民先進国における言語政策 4. リンガフランカ・コミュニケーション シヨンの分析	1. 各メンバー研究テーマに即した国内調査、ならびに海外調査の継続実施 2. 2010年度までに収集したデータの分析 3. 学内における公開研究会の開催 4. 学外研究者・学外研究グループ・市民グループ等との連携 (共同研究会・シンポジウム等の実施) 5. 2009年度の研究成果の国内学会ならびに海外の学会等での発表 6. 叢書の原稿執筆	富谷	彰・孫・堤・アリン・富谷・細田・小林・横倉・(非)近江	9	2012年 予定
12 〈身体〉とジェンダー	近代以降の性別境界や表象、意味作用に注目しつつ(階級、「人種」民族、植民地関係などの要素にも関連付けながら)、ポリティクス/権力が作動する場でありメディアである〈身体〉を考察する。	〈身体〉を考察する。 「(悪女)と(良女)めぐる身体表象」(菅野社)として出版する。 (2011年)	笠間	入江・小松原・山口(ヨ)・村井(ま)・熊谷・ラットクリフ・笠間・(非)前島・(学外)金(貞)	9	2011年
13 自然観の東西比較	自然観についてヨーロッパと東アジア(とりわけ日本)の比較対象を研究テーマとする。	当面は、年2-3回程度の研究会を行い、同時にフィールドワークを行うこととする。	伊坂	伊坂・坪井・前田・上原・小熊・鳥越・村井(ま)	7	
14 近代都市の表象	夢と幻滅を伴いつつ近代化し、快適さとともにさまざまな問題を生み出したきた欧米・東アジアの都市について、どのような表象が、どのような諸力と関連しながら提示されてきたかを検証する。	研究会、講演会などにより認識を深め、叢書の出版を目指す。	鳥越	伊坂・熊谷・小松原・鈴木(陽)・土屋・鳥越・日高・平井・村井(寛)・村井(ま)・山口(ヨ)	11	
15 越境する比較文化	比較文学・文化の方法論を用いた研究を行う	毎年6月に国際シンポジウムを開催し、ワークショップの活動の中で研究論文集の計画を練る。 2013年度の叢書出版を予定している。	村井(ま)	村井(ま)・ブッヘンベルゲル・ラットクリフ・前島(志)	4	2013年
16 ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討する。	研究テーマに関連した調査・研究を実施する。	衣笠	衣笠・太田・南・石井・宮崎・山下	6	

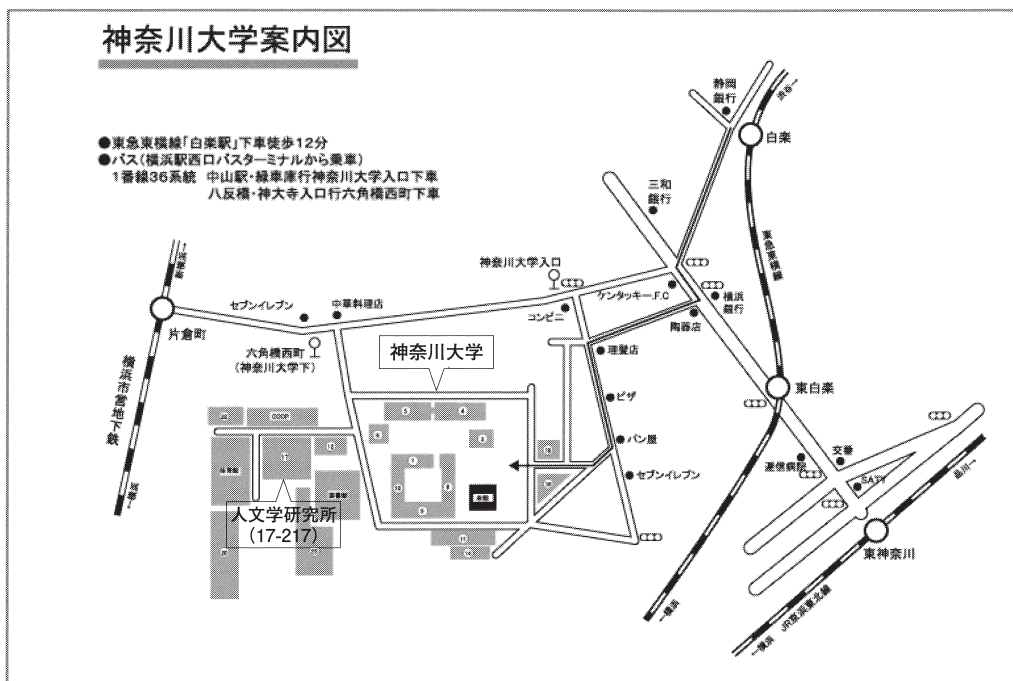
(名) 名誉教授 (非) 非常勤講師 (学外) 学外研究者

神奈川大学人文学研究所叢書一覧

人文学研究所

	年度	タイトル	出版社
1	1983	悲劇 - その諸相と人間観 -	神奈川新聞社
2	1984	日本文化 - その自覚のための試論 -	神奈川新聞社
3	1985	続 日本文化 - 伝統と近代化の再検討 -	神奈川新聞社
4	1986	民族と国家 - 国際関係の視点から -	神奈川新聞社
5	1987	「近代」の再検討 - ポスト・モダンの視点から -	神奈川新聞社
6	1988	いま、日本と中国を考える - 日中比較文化論 -	神奈川新聞社
7	1990	「民族と国家」の諸問題	神奈川新聞社
8	1991	ロマン主義の諸相	神奈川新聞社
9	1991	インディアスの迷宮	勁草書房
10	1992	聖と俗のドラマ	勁草書房
11	1994	秘密社会と国家	勁草書房
12	1995	ヨーロッパの都市と思想	勁草書房
13	1996	国家とエスニシティー - 西欧世界から非西欧世界へ -	勁草書房
14	1997	芸能と祭祀	勁草書房
15	1998	笑いのスコモロジー	勁草書房
16	1999	ロマン主義のヨーロッパ	勁草書房
17	2000	ジェンダーポリティクスのゆくえ	勁草書房
18	2001	日中文化論集	勁草書房
19	2002	歴史と文化の境界	勁草書房
20	2003	「明六雑誌」とその周辺 - 西洋文化の受容・思想と言語 -	御茶の水書房
21	2004	新文化のかたち - 言語 思想 くらし -	御茶の水書房
22	2005	中国における日本租界 - 重慶・漢口・杭州・上海 -	御茶の水書房
23	2006	世界から見た日本文化 - 多文化共生社会の構築のため -	御茶の水書房
24	2007	在外外国人と日本社会のグローバル化 - 神奈川県横浜市を中心に	御茶の水書房
25	2008	表象としての日本 - 移動と越境の文化学 -	御茶の水書房
26	2009	ジェンダー・ポリティクスを読む - 表象と実践のあいだ -	御茶の水書房
27	2009	中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産	御茶の水書房
28	2010	世界の色の記号 - 自然・言語・文化の諸相 -	御茶の水書房
29	2011	〈悪女〉と〈良女〉の身体表象	青弓社
30	2011	グローバル化の中の日本文化	御茶の水書房

神奈川大学人文学研究所 JINDAI ACCESS MAP



〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 (17-217)
TEL 045-481-5661 (内線 4224)
FAX 045-413-1821

執筆者紹介

小倉 英敬	本学外国語学部教授
三星 宗雄	本学人間科学部教授
大里 浩秋	本学外国語学部教授
前川 理子	本学外国語学部准教授

編集後記

『所報』47号が無事刊行されることとなりました。ご協力いただいた執筆者の皆様にお礼を申し上げます。来年度からは『所報』発行のスケジュールがすこし変わります。これまで1冊目と2冊目の刊行が近接していたのですが、1冊目の刊行を従来より若干早めて、2冊目との間をあけました。これにより年度の1冊目に掲載を希望される場合の原稿の提出締め切りは春休み明け、おなじく2冊目は夏休み明けになります。連続して投稿をされる方にはより執筆しやすくなるのではないかと考えています。今後ともご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。(M)

人文学研究所

所 長
国際交流・会計
共同研究G・ニューズレター
国際交流・講演会
「叢書」・「所報」
ホームページ・パンフレット

孫 安 石
村 井 ま や 子
土 屋 和 代
ブッヘンベルゲル・ステファン
前 川 理 子
ラットクリフ・クリスチャン

人文学研究所報 No. 47

二〇一二年 三月二〇日 印刷
二〇一二年 三月二五日 発行

頒価 一、〇〇〇円

編集兼
発行人

横浜市神奈川区六角橋三二七―一
神奈川大学人文学研究所

代表者 鳥越輝昭
電話〇四五(四八二)五六六一(代表)

印刷所

株式会社 精興社

電話〇三(三三九三)三〇二一(代表)